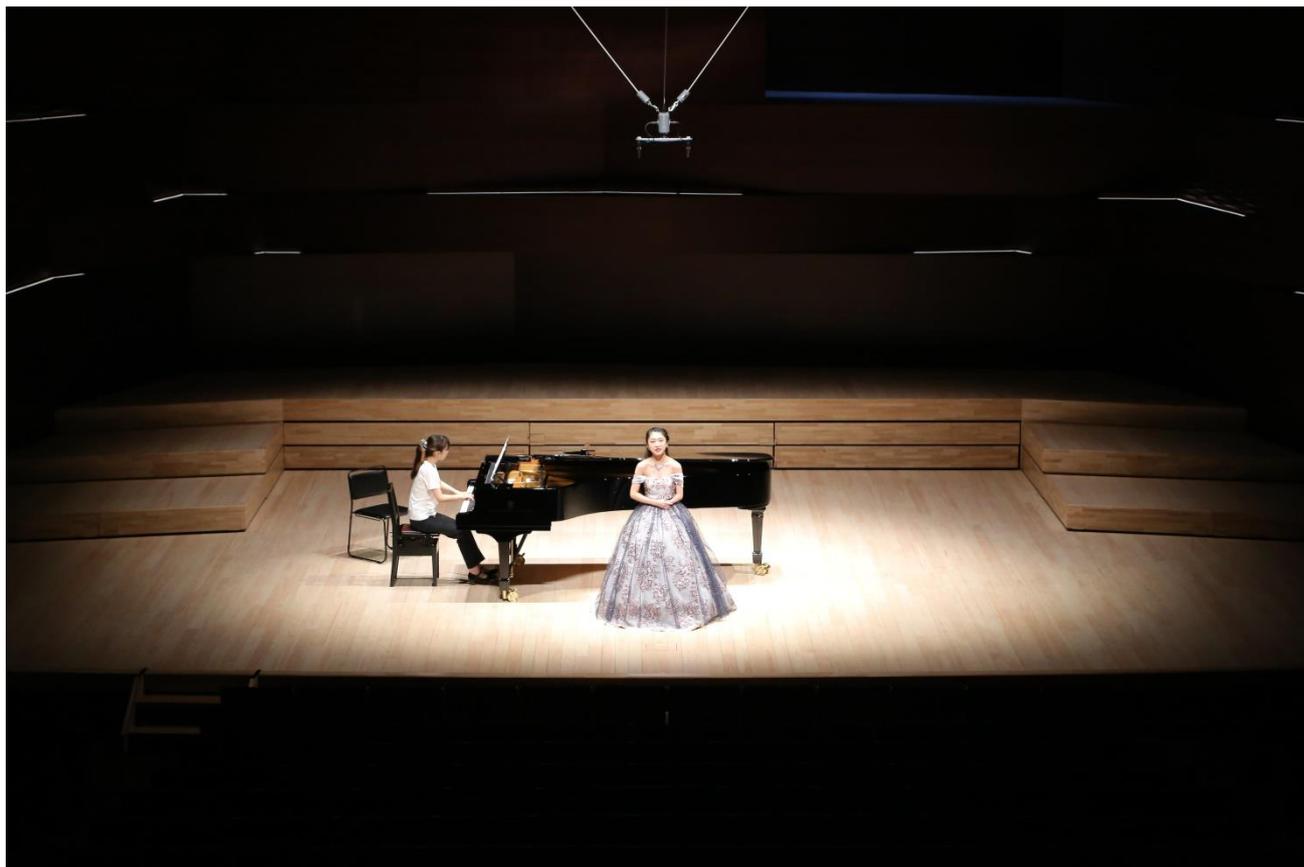


# 日本歌曲試演会

2019.7.30 東京音楽大学 TCMホール



東京音楽大学の声楽専攻は、歌のあらゆるシーンで活躍できるよう、歌曲からオペラ、ミュージカルまでさまざまなジャンルの曲を学ぶことができます。そして、歌曲、オペラの各国の言語による歌唱と共に、日本語による歌の演奏にも力を入れており、これも本学の特長のひとつとなっています。本専攻では全員が、3年次の「日本歌曲試演会」でこれまで大学で学習してきた成果を披露します。今年は7月30日に4月に開校したばかりの中目黒・代官山キャンパス TCMホールで「日本歌曲試演会」が行われました。

この「日本歌曲試演会」は、本学では25年続いています。はじまった時のことをご存知の先生のお話によると、当時日本を代表するソプラノ歌手で、本学で教鞭を執られていた中澤桂先生が「日本人とし

て日本語による歌を歌えない」と声を上げられたのがはじまりだそうです。

終演後に釜洞祐子先生と水野貴子先生に感想をお聞きしました。

「その人その人の個性が出ていていい。学生同士、歌を聴き合って、新しい曲を知って、自分に合ったレパートリーを増やして欲しい。今日は20名あまりもの教員が聴きにいらしていた。教員も、多く指導している外国語の時とは違う、日本歌曲によって発揮された学生たちの新たな持ち味に気づかされたのではないですか」

歌い終わった学生にはTCMホールの感想を聞きました。

田中夕雅さん 歌った曲/中田喜直作曲 鎌田忠良作詞「霧と話した」

「はじめてのホール。自分で歌った声がかえってくる感じはそれほどなかったけれども、響いているな、という感じはした。音量がなくともよく響いている感じのするホール。気持ちよかった」

コンサートで外国語の歌ばかりが続いた後に日本語の歌になると、なぜか急に会場の雰囲気が変わりませんか？頭ではわかりませんが、心がそう感じるのだと思います。日本人にとっての日本語の歌はそういうものなのではないでしょうか。

学生のうちは海外にばかり目が向いてしまいがちですが、日本の歌も積極的にレパートリーにして、すばらしい歌がたくさんあるということをもっと広めて行っていただきたいと思います。

広報課

